



有田商工会議所創立 と 深川進さん



商工会議所のはじまりは明治11年（1878）に東京商法会議所創立からです。その後、各地に拡がり有田町でも明治26年（1897）に白川の勉脩学舎で「有田町商工会」が発足します。

町史によれば、昭和22年11月29日に「社団法人・有田商工会議所」の創立総会が、赤絵町の肥前陶磁器商工協組で開催され「地区内における商工業者の共同社会を基盤とし、商工業の総合的な改善発達を図り、兼て社会一般の福祉の増進に資し、もつて我が国商工業の発展に寄与することを目的とする」とし、初代会頭に深川進さんが選任されました。その後の歴代会頭は別表（四頁）の通りです。

初代会頭就任の頃は、敗戦による極度の疲弊と不況の時期でした。

今回の館報では、深川進さんについて紹介しましょう。

深川進さんは深川忠次さんの長男として、明治31年（1898）3月に生まれました。大正12年慶應義塾大学卒業後に深川製磁（株）に入社されます。昭和2年（1927）副社長、昭和6年に社長に就任されました。その後、県陶磁器工業組合理事長など色々の団体の役員をされます。

昭和22年4月に県議会議員選挙が行われ、県議に当選され、その7ヶ月後の同年11月創立の有田商工会議所会頭に就任されました。その翌23年に戦後はじめて有田陶器市が有田商工会議所で開催されます。年を追うごとに盛んになり、昭和26年の有田陶器市では、沿道に250店が軒を並べ、1週間で3千万円の売上げでした。陶器市へ来訪者に感謝の気持ちを込め

て商工会議所で1万円当りの福引券、5千円以上の買上者には往復の汽車賃、3千円以上の買上客には片道の汽車賃を負担しております。

昭和31年には、有田商工会議所で「有田音頭」の発表会があります。ご存知の有田音頭は作詞・野口雨情、作曲・土井末義、振付け・藤間勘繁でした。

有田陶器市も、前任の蒲地会頭の采配よろしく、昨年は132万人で42億の売上げ、今年も103万人で33億の売上げでした。

深川進さんは、私の若い頃の記憶では、温和で人を包むようなところがありました。でも、会社経営には当然のことながら厳しかったようです。深川社長は「伝統の上に安座せず、常に開拓者精神に徹せよ」と経営指針を示されています。

話は少し戻りますが、深川製磁は明治43年に宮内庁ご用達となり、明治44年には生産額の44%が海外へ輸出されています。また、剣道8段の範士ですが、昭和5年26才のときに大^{オーアサ}麻勇次師範とアメリカ、中国へ剣道行脚をされています。昭和6年頃中国東北部での満州事変を契機に日本人の海外移住が増えます。これに伴い深川製磁の作品が中国東北部へも増加してゆきます。昭和16年頃中国の九江市（景德鎮の近く）に華中陶器（株）という工場を設置されます。そこは良質の原料に恵まれ、素晴らしい陶磁器を作り出そうとする深川製磁の経営体質に合致したからです。昭和18年には商工省より陶磁器工芸製造技術品の指定を受けます。

戦後、昭和23年11月深川製磁で労働争議が起ります。

4頁へ続く➡

季刊 皿 山 冬 No.64

有田町歴史民俗資料館・館報

期日・平成16年12月19日(日)まで
場所・泉山 有田町歴史民俗資料館

・開館時間 午前9時～午後4時30分まで
・展示作品 100点
・入館料 無料

昭和48年、「地雷を踏んだらサヨウナラ」という言葉を残して戦地・カンボジアでカメラマンの一ノ瀬泰造さんは消息を絶ちました。それまでカンボジアやベトナムなど、戦争が日常となった土地で、そこに住む人々や、戦争の実情を撮り続けました。そのフィルム約400本が武雄市に住む両親のもとに届けられたのは昭和52年5月のことでした。

その時から父清二さん、母信子さんの新たな挑戦が始まりました。「息子が残したフィルムから伝わる息吹に込めてやりたい」とそれらを整理し、焼き付けるといふ気の遠くなるような作業を通して、息子・泰造さんの歩いてきた道をたどろうとしたのでした。

この戦地でのフィルムのほかに、学生時代に帰省するたび、足しげく通った有田のフィルムがありました。戦争という生死の際に身を置きながら、一方で自分のライフワークには平和産業である「有田」を考えていた一ノ瀬泰造さん。

昭和40年代の有田は、カメラマンを目指していた若者の目にとどるよう映ったのでしょうか。なつかしい有田の姿と共に、戦争と平和についても考えるきっかけとなれば幸いです。

みなさまお誘いあわせの上、ぜひご覧下さい。



札の辻



有田小学校運動会



猿川付近

©Taizo Ichinose

大都會の喧騒に背を向けて、ふるさとはどこ近い陶磁の里「有田」に何を感じ、何に魅かれたのでしょうか。街を流れる川、戯れる子供たち。陶祖・李參平から延々と伝わる歴史の重さを物語っている泉山。そこに朧めく太陽は未来への「夢」なのか。

陶工の技によって一片の「つちくれ」が見事な芸術品となって誕生するのを、感動の余り息を呑んで見守ったであろう息子の顔——。その頃は既に戦場取材を視野に入れての「有田」だったと思います。バンクラテシュ、カンボジア、ベトナム（1972年1月～1973年11月）の過酷な戦場にあっても、泰造の胸の底にはいつも故郷への念があり、とりわけ卒業間際までねばりにねばって撮り続けた「有田の匂い」のひとコマ、ひとコマがカチツ、カチツと仮寝の瞼の裏をゆききしたことでしよう。

だって、それは当然のこと。73年4月に一時帰国した泰造が私にこう約束したのです。「有田」は多くのライフワークだから、これからは又帰ってきて、ずーっと撮り続けるからね！」と。

最後になりましたが、今から35年前、フラリと有田に現れた未熟な一介の大学生の願いを快く受け止めて、御力をお貸し下さいました有田の窯元の皆様方や町民の方々、そして有田工業高校の先生や生徒さん方に対して、心より厚く御礼を申し上げます。

2004年 10月

泰造の母 一ノ瀬 信子

平成16年度企画展

「一ノ瀬泰造写真展 〜有田の匂い」

ただ今、今年度の企画展「一ノ瀬泰造写真展」有田の匂い」を開催しています。隣の武雄市出身で、当町にも高校時代の同級生がたくさんいらっしゃるとは思いますが、戦争カメラマンとして有名な故一ノ瀬泰造さんが残された写真を展示しています。

生前、ライフワークには「有田」をと思っていた一ノ瀬さんは、学生時代帰省するたびに有田に足を運び、泉山や焼物の工房、陶器市などを題材に撮影しています。撮影された時代は昭和42、43年の頃で、焼き物以外にも何気ない皿山の普段の生活や風景などが、その被写体となっています。

今まで未公開の写真がほとんどで、母親の信子さんや姪の永洲教子さんと共に、数多く残されたネガの中から選んだ100点を展示しています。

一ノ瀬泰造さんといえば、戦争を題材にした写真の方が有名ですが、戦争とは対極にある平和な有田町、有田焼を見つめようとした彼の思いが、残された写真の数々から伝わってくるのではないかと思います。

開催にあたり、一ノ瀬信子さんから有田町へのメッセージをいただきましたので、あわせて紹介します。



一ノ瀬泰造さん (23歳の頃)

経歴

昭和22年 11月1日、佐賀県武雄市武雄町にて清二さん・信子さんの長男として生まれる。
昭和38年(15歳) 佐賀県立武雄高等学校入学。一年生の時、野球部員として甲子園出場。
昭和41年(18歳) 日本大学芸術学部写真学科入学。卒論のテーマ「スポーツ」で特にボクシングに焦点を当て、ジム入門。
また、このころから有田をライフワークとして再び撮影を続けた。
昭和45年(23歳) 大学卒業後、UPI通信東京支局に勤務。翌年退社後、横田基地で働き、時間外はアルバイトをしてベトナム行きの資金を作る。
昭和47年(25歳) 前年暮に勃発した「インド・パキスタン戦争」にせき立てられて日本を出発。バングラデシュ(旧東パキスタン)の悲惨さを目の当たりにし、フリーカメラマンとしての一步を踏み出す。3月カンボジアに入国。シアムリアップに居を構えアンコールワット遺跡への一番乗りを目指したが、カンボジア政府軍とのトラブルで国外退去を余儀なくされる。その後、ベトナムに向かい戦場の取材を続けた。

「安全へのタイプ」でUPI月刊賞受賞。「ベトナム戦争終結」「捕虜交換」「和平」が現実となる時「マンジョイ」列車は平和をのせて、など次々に日本の雑誌に掲載される。
昭和48年(26歳) 8月カンボジアに再入国。韓国の弾薬輸送船に同乗し、メコン川岸から砲撃を浴びながらサイゴンからフロンベンまで通り、その記事「輸送船同乗記」は毎日新聞に掲載される。フロンベン周辺の戦場や激戦地の要塞コンボンチャムで戦士達を追う。
11月22日、または23日「地雷を踏んだらサヨウナラ」と友人への別れの言葉を残し、単身アンコールワットに潜入。その後消息を絶つ。
昭和57年 両親は荒涼としたブラダツクの草原に、9年間眠っていた泰造さんに再会した。



天狗谷窯跡発掘

©Taizo Ichinose

「有田」と「戦場」と

この度、「一ノ瀬泰造写真展〜有田の匂い」が思いもよらず、御当地有田で初お目見えすることになりました。例えようも無い喜びと、もろもろの感慨がこみ上げて参ります。泰造が本腰で「有田」を撮り始めたのは、

大学三年(1969年)の夏休みに武雄に帰省した時からでした。丁度その頃、東京では大学紛争の真つ盛りで、学校封鎖、デモ、ストなどが繰り返され、特に新宿駅や羽田空港など無惨に破壊され、騒然とした空気でした(泰造の取材フィルムより)。そんな世情の中、息子の身を案じていた矢先、暑い日でした。例の笑顔で本人がひょっこり帰ってきたのです。でもゆっくり話を聞く暇もなく、堰を切ったようにその日から「有田通い」が始まりました。

カメラ機材を肩に、バス停に向って歩いて行く息子の後姿が今も思い出されます。ときには重装備で出かけることもありましたが。そんな日は恐らく、当時町の人も通らぬほど草に蔽われ苔むした「古窯跡」あたりの撮影だったのでしょうか。写真を見ますと、昔の繁栄が偲ばれ「古城」にも似た雰囲気さえ伝わってくるようです。

又、「有田」の街を護るかのように見える山並みを、パノラマで迫ったりして苦心のあととも見られます。息子の取材メモには「有田の街の煙突から今も煙がたち登り、焼き物のおりを漂わせている」と書かれています。

戦後インフレの時代でもあり生活も厳しいときです。年末に向け再三団体交渉の場がもたれ斡旋により賃上げ交渉が妥結しています。昭和27年にはミクロスが好調でした。昭和32年有田商工会議所創立10周年に町長より、その功績をたたえ感謝状が贈られました。昭和33年5月中小企業の功勞により藍綬褒章を授与されました。そして昭和37年12月17日商工会議所会頭任期なかばにして64才で亡くなられました。(正6位勲5等双光旭日章)

深川進さんは、子供達に「人の意見を聞き、何物にもとらわれない素直な気持と、どんなことがあっても波風をたてずに平常心で臨むこと。また天狗になるな、へこたれるな」と諭されていたのです。

事業経営に携わる人に「四耐」という言葉があります。それは①「冷に耐える」－経営者は孤独や冷やかな批評にも耐えてゆかないといけない。耐えることによって人間として深まり、視野の大きな人となる。②「苦に耐える」－経営者の毎日は重圧の連続です。困難、逆境に絶えずぶつかるものです。然しそれに耐えてこそ道が開かれてゆくものです。③「煩に耐える」－資金不足、クレーム、売上げ減など、そのときの状況に応じて手の打ち方を変えてゆかないといけません。煩に耐えることにより成功の糸口が見えてきます。④「閑に耐える」－孤独に耐えることです。

そして「感動経営」に取り組むことです。感動経営とは①お客様に感動していただく経営、②従業員が歓働(喜んで働く)する経営、③道を貫く経営、すなはち創業の精神を忘れずに謙虚に取り組むことです。

今回の館報では、商工会議所初代会頭・深川進さんを紹介しました。現在、有田の業界は厳しい状況にあります。しかしながら「経済と経営」は次元が違います。

今年11月1日より商工会議所会頭も、山口隆敏さんによりスタートしました。有田の業界を挙げて一致団結して、この不況を乗り越えたいものです。

(久富桃太郎)

別表 歴代会頭 (敬称略)

	氏名	任期
初代	深川 進	昭和22.11.29～昭和37.12.17
2	岩尾新一	昭和38. 1.18～平成 元. 1.10
3	山口秀市	平成 元. 1.11～平成 7. 1.12
4	深川 明	平成 7. 1.13～平成10.10.31
平成10年より会頭の任期は3年、11月1日更改と決定		
5	蒲地昭三	平成10.11. 1～平成16.10.31
6	山口隆敏	平成16.11. 1～



「一ノ瀬泰造写真展」を観て

11月20日より当館で始まった「一ノ瀬泰造写真展～有田の匂い」は、初日より多くの人にご観賞いただいております。写真展をみてのご感想の一部を紹介いたします。



◎下関市・佐々木様

泰造さんの写真展を首を長くして待っていました。有田の街の人々の生活の匂い、街のにぎやかさ、職人の凛とした表情、はりつめた空気、口にお財布をくわえて一所懸命にお目あての器を手にする人、ショウウインドーの器をじっと眺める人々etc、写真の人々が今にも動き出しそうでした。私は山口県から来ましたが、街のたたずまいは、今も変わらず、さっき通ったあのお店、あの銀行、昔もやっぱり同じ場所にあったのかと楽しんでしまいました。泰造さんが歩いた有田の街、又じっくり伺います。ありがとうございました。

◎有田町・梶原茂弘様

有田の情景を残すのがライフワークと聞いて感動しました。有田ン者として、ここに住んで、自分達の街を誇りにしたいと思いました。泰造様の母上をはじめ、企画展を催された皆さんありがとうございました。

◎札幌市・KURI様

札幌から遊びに来て、何気なく覗いたら、この写真展でした。偶然にも素晴らしい写真と一ノ瀬さんの生き方に会え、同じ世代として感動しました

◎神埼町・O, H様

新聞を見て、一ノ瀬泰造展が開かれていると知りました。写真を見せていただき感動で胸の鼓動を覚えました。昭和の有田町が、しっかりとれている写真をじっと眺めて、懐かしくジーンと熱い気持ちがこみあげてきます。

季刊『皿山』

通巻64号 (平成16年12月1日)
編集・発行 有田町歴史民俗資料館

〒844-0001 佐賀県西松浦郡有田町泉山1丁目4-1
☎0955-43-2678 FAX0955-43-4185